

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者 樂 地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦 主 其 臂 力 顕

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
 死 以 死 滅

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
 活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
 腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。
 憐 賜

【 日本の亞使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハストのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよ うしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
 照 者 亞 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群爲

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい
全世界爲 生命賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈 給

【 日本の亞使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき
光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなをし、かれらにか
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 三歌齋經のコンダク 第6調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世
 えいちをたまひ、ぜんちをあたうるしゅ、
 睿 智 賜 善 智 與 主
 むちのもののきょうどうし、まづしきものの
 無 智 者 教 導 師 貧 者
 ほごしゃたるしゅさいよ、わがこころをか堅
 保 護 者 主 宰 我 心 堅
 ためてさとらしめたまえ、ちちのことば
 悟 給 父 言
 よ、なんぢわれにことばをあたえたま
 爾 我 言 與 給

え、けだしみよ、わがくちはもださずして
蓋 視 我 口 黙

なんぢによぶ、じれんなるしゅよ、われおちい
爾 呼 慈 憐 主 我 陥

りしものをあわれみたまえ。
者 憐 給

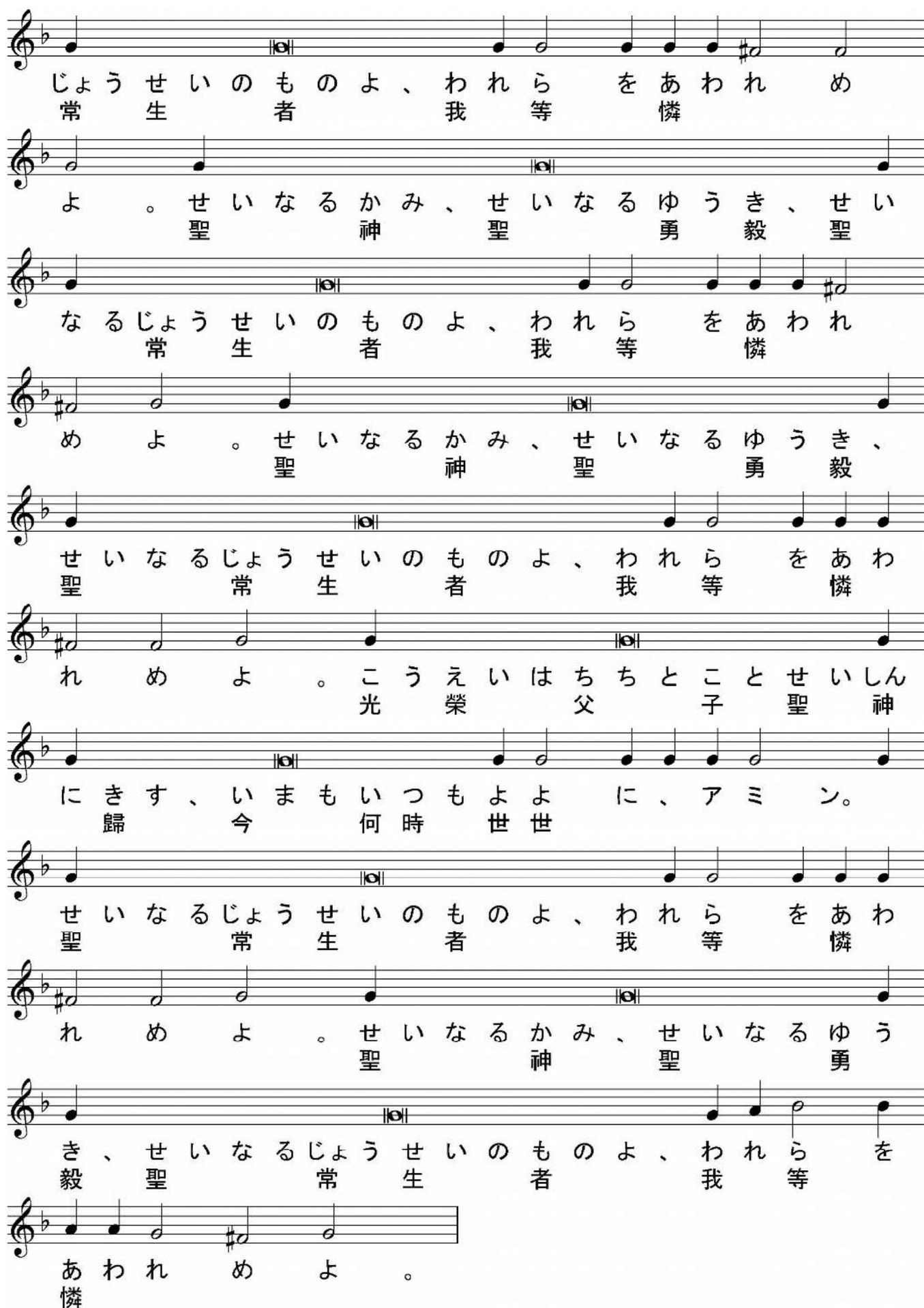
司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより^{さんえい}讚榮せられ、^{ことごと}悉くの^{てんぐん}天軍より^{ふくはい}伏拜せられ、^{ばんぶつ む ゆう}萬物を無より有となし、^{ひと なんぢ ぞう しょう}人を爾の像と肖とに依りて造り、^{よ つく なんぢ もるもろ たまもの もつ これ かざ}爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこなもの す}願う者に智慧と明悟とを與え、^{そのすくい ため つうかい}罪を行^う者を棄てずして、其救の爲に痛悔
た われらいや ^{ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
^{しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい}爾は聖なり、^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖



じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者我等を憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なるかみ、聖なる勇毅、聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生者我等を憐
 め。よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖なるかみ、聖なる勇毅
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖常生者我等を憐
 れめ。よ。こうえいはちちとことせいしん
 光榮父子聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸今何時世世に、アミン。
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわ
 聖常生者我等を憐
 れめ。よ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖なるかみ、聖なる勇
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 毅聖常生者我等を
 あわれめ。よ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 大齋前の主日 第8調 】

司祭) ^{つつし き} 慎みて聴くべし、^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅなんぢら かみ ちかい な つぐの} プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつぐの
主 爾 等 神 誓 作 して つぐの 償
えよ、

誦經) ^{かみ し そのな おおい} 神はイウデヤに知られ、其名はイスライリに大なり、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつぐの
主 爾 等 神 誓 作 して つぐの 償
えよ、

誦經) ^{しゅなんぢら かみ} 主爾等の神に

ちかいをなしてつぐのえよ、
誓 作 償

【 アポストロス 使徒經 112端 ロマ書13章11節~14章4節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しよ よみ} 聖使徒パヴェルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聴くべし、

誦經) ^{けいてい いま われら はじ しん とくくら すくい さら われら ちか よるす ひる} 兄弟よ、今は我等が初めて信ぜし時に較ぶれば、救は更に我等に近し。夜過ぎて晝

ちか づけり、故に我等昏昧の 行 を除きて、光明の 甲 を衣るべし。我等晝に在るが如
く、 行 を 美 しくすべし、饗饗及び沈湎好色 及び邪侈、争闘及び嫉妬すべから
ず。 乃 爾 等は我が主イエス ハリストスを衣よ、肉體の 慮 を慾に變ずる勿
れ。 信の弱き者は、意見を詰らずして之を納れよ。蓋 或人は凡の物食うべしと信
じ、弱き者は野菜を食う。食う者は食わざる者を 藐 する勿れ、食わざる者は食う者を
議する勿れ、蓋 神は彼を納れたり。爾は何人にして他人の僕を議するか、彼は己の
主の前に立ち、或は倒る。且彼は立てられん、蓋 神は之を立つるを能す。

(比較用 口語訳) 今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴樂と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つつましく歩こうではないか。あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない。ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受けいれて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。

【 アリルイヤ 大齋前の主日 第6調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな} 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

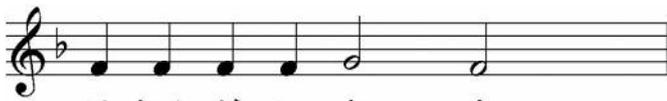
【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 マトフェイ福音書17端 6章14~21節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
爾神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主光榮爾歸光榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) ^{つつし き も なんぢらひと そのあやまち ゆる なんぢら てん ちち なんぢら ゆる} 謹みて聴くべし、若し爾等人に其過を免さば、爾等の天の父は爾等にも免さ

^{も ひと そのあやまち ゆる なんぢら ちち なんぢら あやまち ゆる またなんぢら} ん、若し人に其過を免さずば、爾等の父も爾等に過を免さざらん。又爾等

^{ものいみ とき ぎぜんしゃ ごと うれ さま な なか けだしかれら そのものいみ ひと あらわ} 齋する時、偽善者の如く憂わしき容を爲す勿れ、蓋彼等は、其齋の人に顯れ

^{ため かおいろ そこな われまこと なんぢら つ かれら すで そのむくい う なんぢものいみ} ん為に、顔色を損う、我誠に爾等に語り、彼等は已に其賞を受く。爾齋す

^{とき こうべ あぶら おもて あら なんぢ ものいみ ひと あらわ ひそか ところ いま} る時、首に膏ぬり、面を洗え、爾の齋の人に顯れずして、隠なる處に在

^{なんぢ ちち あらわ ため しか ひそか かんが なんぢ ちち あらわ なんぢ むく} す爾の父に顯れん爲なり、然らば隠なるを鑒みる爾の父は顯に爾に報いん。

^{なんぢら ため たから ち つ なか ここ しみ さび そこな ここ ぬすびとうが ぬす} 爾等の爲に財を地に積む勿れ、此處には蠹と銹と損い、此處には盗穿ちて竊む。

^{すなわちなんぢら ため たから てん つ かしこ しみ さび そこな かしこ ぬすびとうが ぬす} 乃爾等の爲に財を天に積み、彼處には蠹も銹も損わず、彼處には盗穿ちて竊

^{けだしなんぢら たから あ ところ なんぢら ところ あ} まず。蓋爾等の財の在る處には、爾等の心も在らん。

(比較用 口語訳) もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においてになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ